

## アンコール現地リポート 14

「カンボジアのエルドラド（黄金郷）」（パイリンの旅 その1）

### <パイリンの街>

カンボジアの西部、タイと国境を接する町、パイリンは「宝石の町」として知られる。この町は、ロン・ノル將軍によるクーデターによりシアヌーク政権が倒れた1970年前後には、既にクメール・ルージュの支配地域となり、1979年のヘン・サムリン政権の樹立後も政府の支配の及ばない幽遠の地として、近年まで30年近くにわたり長く外界との門戸が閉ざされてきた。

96年にポル・ポト派の主要メンバーであったイエン・サリがポル・ポト派から分裂し、現政権側に傾倒するに至り、パイリンはイエン・サリ派の活動の中心拠点として新聞の紙面をしばしば賑わせ、政治的にも脚光を浴びるようになった地域である。このパイリン周辺で産出される宝石は、ポル・ポト派を長年支えてきた必要な活動資金現の1つと囁かれ、パイリンはあたかもカンボジアの「エルドラド（黄金郷）」のように語られてきた。



2000年10月の雨期の真最中、パイリンへ向かった。パイリンは、カンボジア第2の都市バタンバンより西へさらに80km程と、距離的にはさほど遠くない所に位置する。しかし、雨期の大雨と長年の道路未整備のため、バタンバン - パイリン間の道は至るところぬかるみ、泥だらけで、この80km程の距離を車で行くのに5時間あまりも掛かった。パイリンの近郊では未だ地雷除去が進んでおらず、道路の両脇には、地雷の存在を示すドクロマークが至るところで見られる。

バタンバン近郊では平原地が広がる風景も、パイリンの町に入る頃には緑に覆われた比較的高低のある山並みとなる。その山々にちょうど閉ざされた隙間のような地形のところに町の入口はある。雨期のため、山々の緑は美しく映える。しかし、見た目に何の変哲もない森に、地雷源の存在を示すドクロマークの立て札があるのを見ると、森が何とも恐ろしく、何人の進入も拒む「結界」のように映ってくる。塙、門、垣根、柵、バリケードなど、世の中には人の進入を阻むものは数多くあるが、たった 25cm 四方の 1 枚の看板がもたらす恐怖心が、これ程までに人の行く手を遮ることはないだろう。

### < 宝の山 >

パイリンに到着、ホテルに入り、階上から改めてあたりの景色を眺める。あくまでも緑豊かな山並みに囲まれ、明媚で穏やかな雰囲気とする。町の規模もさほど大きくはなく、中央には市場（プサー）があり、町の真中を通る道路に沿って建物が建ち並ぶ。そういう点では、カンボジアにある普通の小さな町の風景と何ら差異は見られない。この町がつい数年前まで、きな臭い硝煙の匂い漂う町であってとはとても想像出来ない。

こんな思いを抱きながらホテルの向かいの空き地にふと視線をむけると、何やら機械が稼働し、土を掘り出している。最初、碎石場かと思ったが、よくよく目を凝らすと、それは採石場ではなく宝石の採掘現場であった。



ほんの目と鼻の先で宝石が採掘されている姿を見て、仰天する。道路沿いに建ち並ぶ家の中、間口 20mほどの空き地で、工夫が数箇所穴を掘り、奥の方ではその取り出した土砂を水洗し、宝石を採取していた。「宝石の町」とは聞いていたものの、本当に町の中心部の家屋が建つ下で宝石が採掘されているのには何とも驚きを隠せない。ここから最近、大きなルビーが発見されたそうである。



町の中の宝石店を覗いてみた。宝石店とは言っても、何れの店もただ間口が広いだけの普通の家で、その片隅に置かれたショーケースが宝石店であることを窺わせるだけである。一般観光客は来ないここパイリンでは、カンボジアの他の観光地で見られるようなこうこうと照明が輝く煌びやかな店は必要ないのだろう。ショーケースの中には、指輪、イヤリング、ネックレスなどの加工品の側に、小皿に宝石の原石がてんこ盛りにされていた。ここにある宝石は、主としてルビー、サファイア、ガーネットなどだった。

宝石の原石というと非常に高価なもののように考えるだろうが、ここではkg単位で値段のついている原石が並んでいる。最も安いものでは、1kgで50ドルというとんでもない値段の「宝石!？」もあった。「宝石=高価」という考えが根底から覆されるような思いをした。同じ大きさであっても、宝石の価値は本当に「ピンからキリ」まであることを痛感させられた。

#### < 国境 >

パイリンの町よりさらに西に20km程の所にタイとの国境がある。パイリンより北へ数十キロのところに位置するポイペト - アランヤプラテート間の国境では、絶えず車、人が行き交い、活気に満ちているが、パイリンの国境は殆んど閉じられたままといった感じである。それでいて検問所の反対側の小高い丘の上には白垂な大カジノがある。それだけが一際目立つ。この国境の役割は、あたかも「このカジノに来るタイ人のためにのみ設けられているのでは」としか思えない。

国境から帰路、道路わきに放置されている戦車の残骸を見つけた。外観上の損傷はさほど見られないが、全面が鉄錆びで覆われ、それに雑草が絡む。突き上げるように延びた砲



身のみが、在りし日の勇姿を偲<sup>しの</sup>ばせる。日本では戦車の残骸にお目にかかる機会がないが、これを見て、改めて、ここがかつて戦場だったことを思い知らされた。その戦車の残骸の前で、牛が放牧されていたのが印象的だった。

### < 宝石拾い >

パイリンの町への帰り際、道端でうずくまり何かを探す人が視界に入った。運転手の話によると昨日の雨で土が流され、路面に露呈した宝石を拾っているのだと言う。私たちは車を止めその人たちに話し掛けた。彼の手の中には米粒のかけらほどのルビーが2片、大切に握られていた。確



かに道の至る所で宝石を掘っている人々を見かけた。本当に何の変哲もない唯の道で、宝石を掘っているのだった。

こんな所でも宝石が取れるとは、と本当に仰天である。私たちもちょっと試しに拾い始めたが、どの石も宝石のように見えて仕方がない。「欲に目が眩<sup>くら</sup>む」ということ感覚を実感した。私たちが車を止め、宝石を探し始めたものだから、近所の人たちが何事かと近づいてくる。自慢気に自分の拾った宝石も見せる。こんな大きな宝石がここで拾えるのかと知らされれば知らされるほど、目が眩<sup>くら</sup>み、どの小石も宝石に見えてくる。結局、15分ほど探したが、私の拾ったものは唯の石屑ばかりだった。私たちの運転手は、側でいとも簡単に手練れた手付きでひよいひよいと宝石を見つけ、拾う。非常に小さなものだったが、それでも彼は5粒の宝石を拾い上げ、それを私にくれた。折角、探した宝石を私にくれたことに、また一驚<sup>いっきょう</sup>する。それらの宝石がそれほど高価ではないことは分かったが、ともかく「宝石がゴロゴロしている」ということを実感させられた旅だった。

< 夢と現実の狭間で... >

パイリンは本当に興奮冷めやらぬ町だった。カンボジアの地方の村人が育った村を離れ、一攫千金を夢見て、この地で宝石採掘に挑むという話も頷ける。新聞によると、採掘権を得るために1平方メートルあたり100~200バーツ(日本円にして300円~600円程)を土地の所有者に支払うそうである。しかし、一日中、採掘しても、多くの場合、1日3ドル~5ドルにしかならないのだそうである。これらの人々の生活は貧しく、マラリアなどの病気と戦いながら掘り続け、最後には自分の村に帰るの資金も底をつく例が多いという悲劇的な話が語られている。それでも「誰かが100万バーツ(日本円で約300万円)の宝石を掘り出した」というような噂を聞き、「いつかは自分が」という夢を抱きながら彼らは掘り続けているのだという。しかし、宝石の多く産出される地域は資金豊富なタイ資本などにより買収され、大規模に機械採掘が行なわれているのが現実だという。ここでも一攫千金の影には数多の貧者の苦悶があるように思えてならなかった。

2000年11月5日

上智研修所にて

荒樋久雄

(参考文献)カンボジア日刊紙「Cambodge Soir」2000年10月27日~29日号